
俺と仲間とその他物語

P S P - 1 0 0 0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と仲間とその他物語

【Nコード】

N2181I

【作者名】

PSP - 1000

【あらすじ】

無事、高校に受かった、俺。青山君。あだ名は千！

何故かって？

PS が皆と違って1000型だからさ。(T-T)

そんな俺と愉快な(?)仲間達の熱い青春ストーリー！
さあて、先生にでもいたずらしてくるかな。

そのき！ 俺とは。（前書き）

初めてやる学園ものです！

ユーモア爆発でいくんで、よろしくお願いします！

あ、あと携帯での投稿なんで、若干短いです。すんません……。

その昔！ 俺とは。

高校、無事入った俺。俺は俺。

あおやまつとむ
青山努

ああそうさ、なんのへんてつもない名前だ。いいだろ？

・・・良くないか。あだ名だってある。千だ！！何故かって？それは、友達とゲームなどで通信するとき、俺以外の皆は、新型だからだ。(T-T)

そうさ、俺はこれからもPS は1000型さ！なんせ金なんてないからな。

と、とりあえず、とある公立の高校に無事受かった俺！・・・まあ、余裕だったけど。入れないよりましさ。

友達も俺と同じところに入った奴らもたくさんいる。

そうさ、これは俺や友達の青春や、感動(?)のストーリーなのだ！高校生なんだから、恋もするし、行事にも熱い！全力だ！・・・といいけど。

だが、それ以上に俺達はいたずらが好きだ。それに普通にエロい！・・・威張るとこじゃないね。

あと、下品！これは外せません。高校生にはエロと下品がつきもの！ってこんなに印象の悪いストーリーは初めてだな。

え、読みたくない？そりゃないよ。ユーモアたっぷり、120%だぜ！さらに果汁いり！

校則ギリギリのいたずらを、先生に喰らわすのが、俺らだ！
行事を熱くするのも俺らだ！これも校則ギリギリの範囲な。
そしてエロ……。まあこれの担当は俺じゃなくて仲間達にあたる
けど……。

これも常識的にギリギリにね。

え？ギリギリってどれくらいってか？

うーん。全部ギリギリアウト、ってところかな。

あ、エロがアウトじゃ駄目かww

駄目じゃん！ってね。

そんなこんなで明日から学校だ！！！！

……誰に話してんだろう、俺は。

そのき！ 俺とは。（後書き）

どうぞでしょうか？

まあ、まだまだ始まったばかりですが、今後ともよろしくお願いします！

その弐！ とりあえず彼女の話。（前書き）

どもども、第二話目です。

まあ、まだいたずらのことはしませんが、ストーリーとして、楽しんでいただきたいなど。

それでは、どうぞ。

その貳！ とりあえず彼女の話

「校長の話ヤバいな。溶けるかと思っただぜー。まあなげーなげー！200ダメージくらい喰らったな。」

「お前の最高HPなんだよ・・・？」

「え？9999だよ。」

「なんかすげえ！！なんLvになったらそんなHPになるんだよ！つてか200ダメージくらいなんてことないだろ！」

「全然大丈夫じゃねーかよ。まったく。」

「まあね！そーいやーお前、彼女出来た？」

「！い、いるわけねーだろ！まだ高校始まって一日しかたってないし！」

一日彼女が出来る超人がいるなら俺はそいつに会ってみたい。

「いやー。エロくて女たらしで口説き上手でなかなかハンサムな青山千君ならもう、出来ちゃったのかなって・・・あ、もしかして出来ちゃった？」

「馬鹿かお前は！彼女いないのに出来ちゃった訳ないだろ！それに俺の名前は努だ！つ・と・む！千は名前じゃねえ！」

「じゃあさっさと新型買えよ。PS GOとか。」

「金、ねーし。それに買ったってGO君にあだ名がバージョンアップするだけだろ？」

「ば、馬鹿！ダウングレードだろ、それ言うなら！ぷぷぷ・・・」

馬鹿だこいつ・・・筋がね入りの馬鹿だ。

「千君が五一君って・・・ククク！」

こいつ馬鹿なのか？・・・いや馬鹿だ。けしてひねってるんじゃない。馬鹿だ。馬鹿だと信じよう・・・。

「なあ、いたずら、どうする？」

「さあな。まあ、一目だし、気長に考えよーぜ？」

・・・え？コイツが誰かって？俺の友達やすかわしろうの馬鹿代表、保川翔。ちなみに俺はヤツスーと呼んでいる。

何故翔と呼ばないかというとずばり雰囲気な訳だが・・・。なんとなく翔とは呼べない。

「やっぱ先生か？それとも・・・」

あ、そうそう間違えました、エロ代表でもあるヤツスー。

「どーせまたスカート捲りとかしよーもないいたずらだろ！？」

「な、何故分かった！？」

真剣な顔で俺を見る。

分かるよ、そりゃ。お前の顔見れば。色んなところがゆるんでるモン・・・。

「はあーあ。彼女ほしーなー。ほしー・・・な・・・！！・・・彼女ほしいんだよー！！！！！！」

「キレんなアホ、どこまで短期なんだお前は！！」

「あああもう先生にいたずらしなきゃ気がすまねえ！！」

「激しい八つ当たりだなお前・・・。まあ、まだ復讐するような先生がいないからな。」

俺達の場合いたずらと言えども、意味が無いわけではありませんよ。ほとんど、復讐という理由がちゃんとあります。ハイ。

「あ、じゃな！俺、こっちの道だから。」

「ん？あ、そうか、じゃな！ヤツスー！」

「え？呼んだ？」

呼んでねーよ！

「やっと別れた、保川君と。」

「え？あ、ああ。三木。どうした？」

「いや、さすがに男の子二人の間に入るのはつらいよー」

彼女は三木彩夏^{みきあやか}。幼なじみ・・・に当たるかな。昔は一緒に遊んだけど中学以来ぱったりだけど・・・。

「あ、ああ。・・・なんだよ？」

「え？！なんか今日つつちゃん冷たいな。」

いや、つつちゃんってなんぞや!?!一回も呼ばれたことないぞ、お前に……。

「な、なんだよ、つつちゃんって……」

「いいじゃない、幼なじみの付き合いなんだし。……ねえ……前から言いたかったんだけど……付き合いお!」

そうだねこれからも長々とよろしく……。つてええええ?!

「は、はあ!?!なんだいきなり?」

「私、本気だよ?」

「え、あ、その、待って、考えさせて!」

「んじゃ、メールちょうだいね。じゃあまた明日。」

彩夏はスキップしながら、家に帰っていった……。

「ま、マジかよ……。あいつあんなに積極的だったかなあ……。」

しばらくして家に着く。

「お帰り〜、千。」

俺の名前は千じゃねーし！

「なんで母さんまで俺を千って呼ぶんだよ!？」

「ごめんごめん、冗談よ、冗談。うふふふ。」

「冗談キツイな、もう。」

「あらあら、ごめんあそばせ。」

いつの時代の言葉だっ、それは！

「あー、あと携帯、なりまくってたわよ。」

「え!?メール、みてないよな?」

「見るわけ無いでしょ。」

「うん。あんがと。」

「ひよっとして彼女?!」

ギクッ!さすが女性、勘がするどいですなー。まあ、ヤッスーかも
しんないし、とりあえず自分の部屋に行き、携帯を開いた。『受信
メール1件』・・・なりまくってねえじゃねえかああ!!
俺はメールを開いた。

それは、彩夏からだった。母さん、見事に当てました!

『ねーねー。答えまだ?』

・・・気、短かつ！！まだってまだ別れてから十分もたっていないぞ！？

「どうすっかな。」

彩夏は正直かなり可愛いやつだ。ってか中学ん時は、人気NO.3に入るくらいだった。

だから、俺も断る理由なんてないのよね。

俺は、まあ普通な男だ。強いてどっちかと言えばモテるほう。

その普通の男はとりあえずメールを返した。

『お前は俺でいいのか？でもなんで俺なんだ？』

すると、一分もしないうちに、メールが来た。

早なおいつ！

『前から好きだったから。』

凄い告白だな。このタイミングですか？

・・・てかこのメールのやり取り自体アドレスなんで、とりあえず結論を言おう。

ええ、めでたく付き合うことになったのです。

・・・まだなんもいたずらしてねーな。

まあ、次あたりからいたずらの話はしよう。

俺は今日早めに寝ることにする……。だって疲れたんだもん……。

その忒！ とりあえず彼女の話。（後書き）

どうでした？誤字、脱字等のお知らせ、お願いしますー。

後はギャグがつまらない等の感想もお願いします。

その参！ 数学の恐怖！（前書き）

出ました！初めてのいたずら！

頑張つて、笑ってください！（？）

と、とりあえず、お楽しみ下さい〜！

その参！ 数学の恐怖！

高校始まって早、二週間。平凡な日々がついに終わった。……
と言つと、最初のターゲットが決まったのだった。

それはある、数学の授業。

俺はすっかりノートをとって、まじめに授業を受けていた。……
残り10分まで。

突然、睡魔に襲われた、努君。俺は睡魔と戦った！！！大奮闘の末、
……負けた。

そして意識が飛びそうになった瞬間！

「おい、青山、この問題の答えは？」

俺、当てられた？！

「ふ、ふえ！！？」

突然当てられた驚きと、プレッシャーで思わず変な声が出てしまっ
た！！！！！！

クラス全体が一瞬静まり、そして、……爆笑の海になった（
どんな海だよ?!）

……まあ、つまり。恥をかかせられた恨みを、そっくりそのま
ま返すってこと。

え？その問題に答えたかって？……もちろん、答えましたよ。

「その問題に対するプライバシーが侵害されるから、答えられません！」って。

「……これは受けねらいだな。」

まあ、そんなこんなでその日の放課後、俺はメンバーを集めた。中学から一緒に、同じクラスになった奴らを。

まず、俺だろ、ヤッスーこと馬鹿代表でおなじみ保川翔君、そして新キャラのマツケン（あのマツケンじゃねーよ？）こと松山健太君、ゆう君こと阿部雄平君、最後にボンバーこと斉藤宏太郎君だ。

なぜ、斉藤君がボンバーなのかはさておき、俺たちは早速作戦を考えた。

「お前、プライバシーの侵害は傑作だよなー。」っと、マツケン。

「うるへー。まず、どうやってあいつに恥をかかせるかだ。」

「チョークと黒板消しに細工しよーぜ！」と、ボンバー君。

「いや、ストライクだろ、ここは。」と、ヤッスー。

お前、それ言うならストライキだろ……。馬鹿だな。

「チョークと黒板消しに細工は実行するよ。だけど、それだけじゃあ足りない……。。」

みんな、ここで考え込む。……。するとエロ代表でもある、ヤッスーが言ってくれました。

「教卓にエロ本仕込もうぜ！」

……いいアイデアだけだね。

「その肝心のエロ本はどこで調達すんだよ？」

「うちに親父が読み終わったやつがあるから。」
「あーなるほど。それ、公表しちゃっていいのかな？保川君。」

ま、ヤツサーのエロ思考は父親譲りだということを確認したところで。準備といきます。

まず、チョークと黒板消し。これらはもう、どうするかは決まっています……。

チョークは、偽物を作ります！紙粘土の中に重りを若干入れて、冷凍して固さを作ります。そして、チョークの粉に付け、あたかも本物かのように見せます。

もう一本は、出来る限り平たい石を見つけて、それを白く塗り、先ほど作り方を教えた物をもう一本短く作り、先端に取り付け、本物のように作ります。

納得のいく石を見つけるまでに五時間かかりました……。え？製作時間？二十分ほどですね。

で、黒板消しをどう細工するか。それは、一つは、メジャーなああの仕掛けを作ります。

後は、全ての黒板消しに同じ仕掛けを施します。その仕掛けとは！？後ほどお話しします。

あー。後エロ本は教卓の中に入れておきます。何冊か。

これで設定完了！後は授業が始まるのを待つだけです。

そして次の日。数学の授業。あ、ちなみに、この高校、いたずらで停学、退学者はいません。安心してください。

とうとう先生が教室に入ってきます。しかし、スライドドアを開けた途端！

頭の皮膚が露出してる部分に見事に！黒板消しが命中！先生に250ダメージ！先生は怒った。もちろん、爆笑で声がかきけされただけだ。

落ちた黒板消しを無視して、先生は黒板の前に立つ。さっきのはほんの序章。本番はこれからだー！「えー。授業を始めるぞ。今日は、ベクトルの説明だ。教科書は・・・」と、先生の授業が始まった。やがて、先生は説明を終え、図を描くために、チョークを手に持った。もちろん、先生もクラスの皆も、俺達以外は細工についてなにも知らない。

そして、先生は偽チョークで図を描こうとした。だが、描けるはずもない。紙粘土ですから。

変な音を立てるだけ。焦る焦る先生。笑う笑う俺達。慌てて先生はチョークをもちかえた。しかし、こっちは描けるんだけど・・・。先生は図を描く。しかし、途中で、間違えてしまう。慌てて黒板消しで消そうとする先生。しかし消えない！そりゃ、そうさ。石灰じやなくて、普通の石だもん。そして、先生はもう一つの異変に気づく。

黒板消しが手から離れないのだ。

振り回すが、離れない。これが、俺達が施した仕掛けだ。名付けて、

『スーパージョーク！』

昨日、作ったんです、セメントやらなにやらで。もう威力は半端じやねー。

焦る焦る、焦る先生は、教卓に助けを求める・・・訳じゃないが、何か無いかと必死で探す。先生の残りHP、23。そして、中からエロ本を引っ張り出す。大ダメージ！先生は力尽きた。

あ、でもあまりにも可哀想だったんで助けました。その後、こっぴどく叱られた俺達。

まあ、そりゃそうだがな。

「あー。先生あの焦りっぷり、面白かったなー。」と、ボンバー。

「いやー。やっぱり面白いねー。いたずらは。」と、マツケン。

「とりあえず、復讐その一、大成功！」と、俺。

「まあ、今日は、これにて開戦だな。」

「・・・お前、それを言うなら・・・あ、でも意味としてあってるか。じゃあ、今日はこれにて、解散！」

「」「」「おー！」「」「と、四人。

実は、いたずらのことより、エロ本を持ってきたことについてのほうが激しく(?)怒られました。

まあ、過激だったからねー。あのエロ本。

改めて、ヤッスー家のエロさはもう、尋常じゃなく半端ないことを、確認した俺達でした・・・。

その参！ 数学の恐怖！（後書き）

どうでした？

頑張つて笑いを入れたのですが。

まあ、楽しんでくださると幸いです。

では、また次回。感想等、お願いしまーす！

その肆！ 齊藤君がボンバーな訳。(前書き)

はい、謎があかされます！

更に、下ネタもあります・・・

すみません。

その肆！ 斉藤君がボンバーな訳。

・・・もしかして、皆、気になっているのか！？

そりゃ、そうだろうな。

ボンバー斉藤って・・・。

実際どうよ！？さすがにボンバーって呼ばれてる奴はいないんじゃないかな？

知りたい？なんでボンバーなのか。知りたい！？

まあ、教えよう。

斉藤宏太郎君と初めて会ったのは小学生3年生の時。

斉藤君と同じクラスになり、よく遊んでいた。そしてまあ、当たり前のように仲良くなり、互いをよく知り合うようになった。

他の友達とそこらへんは変わらないわな。そりゃあ。中学になった。

そう、思春期が始まり、男の子が成人に近づき、若干エロくなる時期だ。

まあこの話、あまりエロ関係無いけど・・・

皆、好きでしょ？そういつの。

まあ、同じクラスになった中？。

普通に日常を楽しんでいた、保川君、斉藤君、俺。

「おーい、千！（はい、この頃からです。）なんか面白いことしようぜー」

「面白いことって？」

「いや、なんかさ。・・・スカート巡り・・・じゃなくて捲りとか？」

いや、どっちも変わらなく変態的な行為だから。辞めよう？

「そうだな。さすがにスカート捲りはヤバいけどな。」

いや、そりゃそうだろ！

「とにかく、何かないか？」

「あ、おい、保川、見ろ！中3の女子だぜ！」

保川君は、目にも止まらぬ速さでそっちを向いた。

おい、お前。なんなんだ？

「は、はーん・・・スカート短けー・・・」

は、はーんって・・・お前それただの変態親父だぞ！？

「保川、お前その反応はヤバいぞ？」

だよ、ヤバイよね。

とその時！

「きゃー！」

中3女子が、何故かつまずき、転びかけた！

保川君はそれを見逃さなかった。

「……………見える！見えるぞ！」

「お前、死ねや。いますぐ死ね。ゴートゥーヘル（地獄に落ちろ）！！」

「はあー……………神様ありがとうー……………僕もう、死んでもいいや。あははーん。うふふ。」

「こいつ、ぶっこわれたぞ、斉藤。」

「修理に出すか！？」

「ヤバい、ちょっと下の方が……………」

「それ以上言ったらぶっ殺すよ？マジで。健全じゃないし。」

はい、すみません。下ネタです……………」

その日、保川君は授業に集中することはなかった。

だから、理科の授業。

「はははーん……………うふふ……………」

はい、この時点で保川君、ただの変態ですね。

「おい、保川。幸せそうだな。なんか良いことでもあったか？」

先生が保川君を指す。先生！今はダメだって。

「この問題、解いてみる。」

黒板には、p n 2と書いてあった。

ああ！尚更ダメだから！

「え？パンツ？」

それを言ったあとに、保川君は目を覚ましました。

いや、寝てた訳じゃないけどな。

クラスは・・・シラケた。

つてか女子の目が半端なく怖かったのを覚えてる。

「え、ちょ、保川マジキモイ・・・」

「か、カッコイイのに・・・どうしたの、いきなり・・・」

女子はまずいくらい退いてた・・・

「あゝ！いや、その・・・。」

「保川、お前、顔洗ってこい。」

「は、はいい……。」

はい。復讐タイムですね。

この理科の教師、やっちゃいましたよ。

「保川。お前も悪いぞ?」

「うるせー。あの野郎のせいで俺の人気はガタ落ちだ。ぶっころ・
ばしてやる」

そこ、妥協する必要ある!?

「あいつは理科だからな。理科でぶつけるか。幸い、次の授業、実験で理科室使うもんな!」
俺は提案した。

「よし、そうしよう。」

「あ、おい、保川!中3女子だ!しかもダイナマイトボディ!」

「ホワッツ!?レットミーシー!」

何故英語!?ホワイイングリッシュ!?

「あー……ヤバい。」

確かにダイナマイトボディだった。

「ってそんなことしてる場合じゃねーよ!」

「いや、もう俺、復讐しないでいいよ。」

「貴様ぁー!!」

「あら、保川君よ。どうしたの。」

まさかの中3女子がこっちに向かって来る始末!

「あ、はい、いや、その、まあ、なんてゆーか、は、はぁー!。」

保川、てめーどんだけ動揺してんだよ!?

「いつも綺麗、ですね。」

お、お世辞かよ! まあ、ホントのことだけだな。

「ありがとう! あ、じゃね! 保川君!」

行ってしまった。

ミカエルが……。

「もう、復讐、止めようか……アハハ。」

この瞬間、皆ぶっこわれました。

でも復讐を止める訳にはいきません。

理科の実験の前日、俺達は必死で反応の勉強しました。

そして、次の日。

「イツツ、復讐タイム。」

何？英語流行ってんの？

「ベラモツツア、ラスペニヤアーティスト！」

・・・スルーしましょう。

さあ、時間がきました。実験です。

一応この時の学習内容は、硫黄と鉄の化合。火、使います。

「オーイエス！フレイムオン！」

斉藤、てめーまで。しかもファン スティック4じゃねーかよ！

「よし、昨日の作成通りやるぞ。」

「「アイアイサー！」」

まず、俺が先生を呼ぶ。

「せえーんせえー！アイドンノーハウトウドウー！」・・・うけねらいだよ、うけねらい。

「ちつ、どうした、努。」この先生、俺だけ努って呼ぶんだよなー。しかも今舌打ちしたし。なんで？

「いやー。硫黄が鉄とハウアーユーしてハウドゥユードゥーなんですよー。」

「意味が分からん。スピークジャパニーズ！」

先生、意外とノリ良かったです、この時。

「いや、だからその・・・」と、俺は先生をストールさせる。まあ、ようするに、時間を稼いでるんだな。

「努、分かったぞ！ここ、こうするんだ！」

「おお、そうか。先生、ありがとうございます。解決しました。」

先生はまた小さく舌打ちして、教卓に戻った。まあ舌打ちは決して怒ってる訳じゃないけど。

「おい、ちゃんと仕掛けたか？」

「ああ、千。バッチリだぜ！」

斉藤君は、手先が器用で、助かります。

「さあ、イツツシヨータイムだな。」

まず、先生のケツに硫黄と鉄粉の混合物を仕掛けます。

まあ、衣類に付けるだけですけど。

そして、火を着けます。

先生に。危ないから良い子は真似しないように！

反応は、熱が発生するので、追加の加熱は必要ありません。

そして最後に、先生が通りかかったところで。

ガス栓を開き、その先のチューブを先生のケツに向けます。

すると・・・

ボンバー！！！！

斉藤君がチューブを持ってました。

「パウ！！」

面白い声を上げて、先生は倒れます。

「あ、先生！すみません！ガス栓が暴走しました・・・」

さらに、おまけに先生のケツは、一日中腐った卵の臭いがするのであった。

そして、この日から、斉藤君はボンバー斉藤になったのだ。（保川君いわく。）

めでたしめでたし。

その肆！ 斉藤君がボンバーな訳。（後書き）

どうだったでしょう？

楽しめましたでしょうか？

でも、危険ですからくれぐれも真似しないで下さいね！

その伍！THEグレートヒーロー保川（前書き）

今回は、後半割りとしリアスです。

でも前半はかつ飛ばすので、気をつけて下さい！

とくに子供の皆様！

それでは、どしどし。

その伍！THEグレートヒーロー保川

「なあ。何で干つて保川とつるんでるんだ？」

すっかりおなじみの『干』。まあ、いいんだけどね。

「え！？ユウ君、何だよいきなり？」

「いや、何でお前みたいな意気地無しで馬鹿でエロでカス的な存在であるお前が、かなりエロいけどクラスの人気者である保川君と一緒にいるのかな？って。」

「お前、ボロクソいやがって……。俺はエロしかあてはまらないぞ！？」

「いや、冗談だから。質問に答えてくれよ。」

いや、だってマジ顔であそこまで言われると、冗談だと思いたくても思えないから……。

「いや、あれは幼稚園の時かな？あんまし詳しく覚えてないけどな。うん。あのエロ爆弾と会ったのは……。」

そう。幼稚園のころ。

ヤッスーは……その頃から人気者で、変人とも言える人であった。

「なあ、おまいら……。」

「なにになに〜！？保川君〜！」

「セツ〇スって知ってる〜？」

「何それ〜？」

幼稚園児がセツ〇スとかつ。早！！ってか言っちゃ駄目だろ！どこで覚えた！？このエロ爆弾！

「いや、昨日父ちゃんが言ってるさ〜。」

おい、保川父。早速悪影響だぞ〜。

「何だよそれ〜。保川君なんか変〜！？ねえ、先生〜！セツ〇スって何〜？」

……駄目だつて。先生はよく理解してるんだから。成人だし。

「な、な、何言ってるの〜！？（焦）そんな言葉、無いよ〜？誰が言ってるの〜？」

「保川君がね〜。父ちゃんから聞いたつて〜。」

先生、焦りすぎ……。つてか言葉の存在否定してるし……。めっちゃ赤面じゃん。

まあ、そんなこんなで幼稚園から一緒だった訳です。エロ爆弾とは（定着）。

「ねーねー。保川君。鬼ごっこしよ。」

俺はある日、何故か工口爆弾を鬼ごっこに誘ってしまった。

「え？あ、青山君だけ？いやよ。やろ。」

って訳で、俺、保川君、幼児A、B、C、etc.など、八人くらいで鬼ごっこをすることになったのです！

「じゃあ、じゃんけんしよ。」

「じゃんけんって何？」

「えーとね。ちよきとぱーとぐうがあってね、ちよきはぱーに強くて、ぱーはぐうに強くて、ぐうはちよきに強いんだ。それで鬼ごっここの鬼決めるの。」

と、ここで保川君。

「最強のやつって無いの？」

なんてこと言ってるんじゃない、貴様あー！？

「え、え？さ、さいきよー？」

「ま、いいや。さつさとじゃんけんしちゃおうぜ。」

「う、うん。じゃんけん、ぽい。」

保川君、見事に負けました。

「俺が鬼か〜。皆、そっこーで捕まえてやる！」

保川君、捕まえたなら鬼変わるんだよ〜。

「わあ〜！保川君が来たー！」

女子が逃げます。それを執拗に追いかける保川君。リアルにこの頃からスケベだったのかな？

つてか異性追いかけるとか汚ね〜！

「ちゃん、捕まえた〜！」

しっかりと ちゃんに抱きつく保川君。

「あ〜！何やってんの〜？保川君〜。」

駄目だろ、抱きついちゃ。この変態野郎。

「じゃあ ちゃん鬼だね！」

.....

「とまあ、幼稚園はこんな感じ。」
俺は話し終える。

「あいつ、根っからの変態スケベエロ爆弾野郎なんだな。」

な、なんと・・・ユウ君、なんて酷いクソニックネームなんだ・・・

「おま、なんてニックネームだよ！ひでー・・・。」

「おい、俺がなんだって？」

「ああ！変態スケベエロ爆弾野郎！！！」

「・・・・・・・・つ。」

「お前、涙こらえる顔するなよ。こっちも泣きたくなるだろ。」

慰めたのか？俺は。

「変態スケベエロ爆弾野郎は無いだろ・・・。」

あまりに酷すぎるニックネームにヤッスー、かなりの精神ダメージです。

「くっ、お前らは俺のことそう思ってたのか！？」

「まあね。」

ユウ君、即答じゃねーかよ。

「う、うわあああー！！」

「い、いごめん、悪かったって。冗談だよっ。」

だから、ユウ君が言うことは冗談に聞こえないっての。

「さあ、続き話すか。」

「え！？本人いるのに？」

「ん？何が？」

「まあ、そのまま小学校入って、奇跡的にずっと同じクラスだったわけよ。俺達は。」

「ああ。そうだったっけ？」

「お前……。」

……

まあ、中学は割りと楽しかったな。まあ、斉藤君もメンバーに加わりの。雄平君も出現した一の。色々ありました。

その中でも、保川君改め変態スケベエロ爆弾野郎が一番目立った（？）のが、この事件（？）。保川君が本当にいいやつだな、って思ったことがあつた事件（？）でした。

それは、2年の文化祭。

俺達はクラス一丸となって劇の練習をしていた。

「ああ、カルパッチョ。何故貴方は生の肉料理なの？何故イタリアなの！？」

保川君の台詞です。

そして、女装した俺（クラスに強要された+かなり似合ってたから、

そしてもちろん反論したが、クラスに負けたという理由で。()の台詞が、

「ではなぜ、モンゴルは神秘的なイメージがあるの？」

でした。なんちゅー劇なんでしょう。題名は「世界各国は何故美しいのか」。

タイトルにまで『何故』がありました・・・。

と、とにかく、カルパッチョ（俺）とモンゴル力士ヤッスーが恋に落ちる、というストーリーです。途中、様々な国から刺客が来て、邪魔するんですが、その邪魔を振りきり、無事にゴールイン（したくなかったけど）するというお話です。

まあ、とりあえずいつものように、練習しました。

まあ、俺の女装が似合う、ということ、他のクラスからも注目を浴びてました。先生にも間違えられました。あー。やだやだ。

そして、一通り練習を終えて、帰る用意をした時。

「着替えるのダルいな〜。」

「じゃあそのまま帰れば？」

「は？この格好で？馬鹿じゃないの？」

ブロンドのカツラにドレスという格好でした。

「いや、ごめん。冗談だから。」

「うん。さっさと着替えて帰るか。」

と、その時！

「制服が無いぞ？」

「制服が内蔵？」

「死ね、保川。永遠に。」

「死んだら永遠に帰ってこねーよ。てかマジで無いのか？」

「ああ。このまま帰るのか！？」

「まあ、誰かが衣装だと思って持って帰っちゃったんじゃない？」

はい、そうです。

誰かが本当に間違えて持って帰っちゃったみたいでした。次の日、本気で謝ってました。もちろん、事故だったんだし、彼に非はなかったんで、しつかり許しましたけど。

事件はその前の日に起こってました。

俺とヤッスーは帰ってました。俺は衣装のまんまで。

そして、帰り道、ヤッスーと別れた直後。

腕を掴まれたかと思うと、口を塞がれました。

いやー。変質者って本当にいるんですね。

そして、犯人は俺の腕を器用に縛りました。

俺が男だと気付かずに。まあ、声もまだ変わってなく、女っぽかったですけど！

「ちょ、お前、何しやがる!?!」

「うるせー！だけど気が強いのも嫌いじゃないぜ!」
「・・・こいつキモい」。吐きそうでした。

「や、保川！助けてくれ！おい、誰かモゴモゴ・・・」

口を再度、塞がれました。いやー。怖い怖い。

「黙らねーと殺すぞ、ガキ!」

お前、どっちだよ？殺したいのか？捕まえたいのか？
まあ、どっちも嫌だけだな。

「さあ、大人しく来るんだ。」

人気も無く、ほとんど誰もいない場所でしたから、誰も来るような
雰囲気がありません。

てか誘拐されるってマジで怖いな。

恐怖だ、こんな奴に・・・

ガムテープで口を塞がれ、車に乗せられました。なんて入念な犯人・
・

そして、犯人が運転席に乗ろうとしたとき。

「おい、お前こんなところでなーにやってる!？」

ヤッスーとボンバー斉藤君が来ました。

「誰だ？お前ら？」

犯人がヤッスー達の方を向いた瞬間、サッカー部のボンバー斉藤君がサッカーボールを蹴りました。

バコッ！

顔面に直撃！

「こ、この野郎！」

犯人が彼らに向かって刃物を突きつけました。

そして、ヤッスーに向かって刃物を・・・。

俺は目をつぶりました。

だけど、さすがヤッスー。

ひらりと刃物を交わし、柔道の背負い投げをぶちかまし、刃物を奪いとります。

「宏太郎、携帯で警察呼べ。その間にコイツをしめおとすから！」

と、ヤッスーが言うと、チョークスリーパーを犯人にかけました。

「ぐはっ、ギブギブ！・・・ぐっ・・・」

犯人は動かなくなりました。死んだ訳じゃないけどね。

ヤッスーは、犯人が起きないことを確認すると、車に駆け寄り、ドアを開けました。

「大丈夫か！？努！」

「モゴモゴ・・・」

ヤッスーは急いで俺を助けてくれました。

「し、死ぬかと思った」

「はー。びっくりした」。お前、マジで女装は駄目だな。」

「こ、こうなるのか。塾帰りの女子の気持ちがよくわかったよ・・・」

どうやら、ヤッスーは俺に返さなきゃいけないものがあつたらしく、後戻りしていた途中、俺の叫び声を聞き、おかしいと思い、ポンパ―斉藤君を呼んだ訳です。

「お前、女装するとかかなり可愛い女子になるからな。もしかしたら、って思ったんだよ。」

「ありがとう・・・助かった」

「……………」

「あー。あったあった。コイツ、めっちゃ可愛かったぜ？」

「マジ？千、女装して。」

「いや、無理。」

「おい、じゃあ変態スケベエロ爆弾野郎、文化祭でコイツに女装させようぜー！」

「そつするか！」

「お、お前らー！！殺すぞー！！」

ちなみに、その当時の文化祭、成功してしまいました……。

おかげで、俺はテニス部にいた（現在もテニス部）訳ですが、ずっと皆にいじられてました。

トホホ。

その伍！THEグレートヒーロー保川（後書き）

はい、園児は決してセツ スなんて言いません！

まあ、でも真面目なエピソードは今回で、最初で最後ですね。

次回はまた普通にコメディーに戻るので、楽しみにしてください！

その陸！ バレーボール！（前書き）

どうも、久しぶりです！

今回はスポーツをテーマにしてみました。

まあ、大してスポーツしてませんが・・・。

とりあえず、お楽しみ下さい！

その陸！ バレーボール！

「おい、千！！ちゃんと相手の穴に入れるよ！！！！」

「ちゃんと決めないと、取られるぞ！！」

「ハア、ハア。やばい・・・。」

「チャンスだつて！！『あれ』、出しちゃえよ！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

よう、みんな！！千だ。いや、違う、青山努だ。え？千でいい？フアザカンナ！！！！

・・・あ、これ。別にやましいことじゃないから興奮しないでいぞ、みんな。

何せこれは・・・

「お前のサーブがはいないと俺達負けちゃうんだぞ！！」

バレーボールの試合だから。体ダカラ。

俺がサーバー。ローテーションでこうなっちまった・・・。

「い、行くぜ！！！！」

「大人しくゲームから除外されてる、千。」

それはつまり、遊王的な意味でか？

「それは酷くない？」

「いんや、常識から考えて絞りだした結論。」

ヤッスーがバレーボールをレシーブしながら言う。

「確かに、そうだ。」

「ヤッスーにしては珍しく正答だな。」

「大きなお世話だ！」

ヤッスーがレシーブしたボールをチームメイトAがトスして、それをチームメイトBがスパイクする。

ボールは相手が触れる前に地面についた。

「よ、よっしゃあああ！やっぱり敗因は千かあ！」

わ、わるかったな。

「よし、ローテーションだ！・・・あ。千がセッターポジションだ・・・。」

チームメイト皆が頭を抱える。

「や、止めてくれ！そういう差別！お、俺はそんなに酷いのか！？」

「もう。酷いなんて言ってもらえない……」

最悪、だな。

「まさに、千は『最凶』だな。」

ひ、ひでえー……。

「お、俺だつてやる時はやるんだよ!」

「女の子を?」

「死ねえ! ヤツスー!」

あまりにも不適切だろ、それは。

「ああ、クソ。皆して俺を馬鹿にしやがって!」

チームメイトがサーブを決める。

相手チームがレシーブ、トス、スパイクでボールを返す。

「ま、また空襲だああ! あ、ボールが千に、千にいいいいヤアアアアアアア!」

「く、このままじゃ千しかレシーブ出来ない! 万事休すか!??」

お、大袈裟じゃない? なに、万事休すって……。ただの授業内での試合じゃん……。

俺はボールをレシーブした。

「おおおおお！！千がレシーブに成功したぞ！？」

チームメート大喜び！

「ええ！？千って性交したの！？」

「死ねえ！ヤツスー！」

「死ね！保川！」

「保川、この馬鹿野郎！」「保川ああ！授業中だぞ、下ネタかますな！！！」

ワァー。凄いブーイング……。つてか最後に先生まで……。聞いてたんだ……。

「うるせえええ！先生以外のゴミカス共がー！！こっそり期待してたのにブーイングしてんじゃねー！！偽善者かてめーらは！！」
……。はい？

「んだと保川コノヤロー！フルボッコにしてやんぞ！？」

おい、挑発にそう易々と乗るなよ。

「俺のスパイクで頭吹っ飛ばしてやんよ！」

「面白れー！！やってみろよ、保川ー！！！！」

これ、そこまで喧嘩じゃないです、よく見ると。

顔が笑ってるし・・・

「だけどこの試合に勝ってからじゃー！」

そういつて、ヤッスーはトスで上げられたボールを思いっきり！

空振りしました。

「や、ヤッスーてめ〜！」

「なに空振りしてんじゃ、エロ川！」

「保川あああああ！」

あ、暑苦しい・・・。

「よし、お前、面貸せ。スパイク打ってやるよ。」

よしってお前・・・。

「俺が百億分の確率でレシーブに成功したのにミスるとはどついう神経してんだ！？ゴラァ！！！！」

「・・・・・・・・す、すいません・・・。」

あ、あれ？なんか皆黙りこんじゃったぞ？

「お、お前怖すぎ。」

「え？あ、ああ……。悪い悪い……。」

俺としたことが……。取り乱したか……。

「ゲームセット！」

「……。あああ……。今日の敗因は保川と千かあ。」

「ちえ、うちら弱すぎやな。バレーボールでは。」

「千さ、なんでバレーボールだけ弱いんだ？他のスポーツは上手いの。」

「代償。」

「あん？」

「いや、だから。代償。」

「なんの代償だよ。」

「君達のようなゴミカス共とつるんでるからその代償なんだろ、千。」

俺は全く別のことを言おうとしたのに……。

「保川、それはそれは。」

「ん？なんか文句あんのか？カスクン。」

テメーは高飛車過ぎるだろ、コラア。

「あああんだとお？まーたカスいいやがったな？エロ川！」

「な、な、な、エロ？ユーコールミーエロ？ホワッツザマター？」

「The meaning that the word really means, you pervert.」

はい？何でリアルな英語？しかも、最後になんかききなれない言葉が。。。

「。。。。わかるわきゃなーだろ、俺はお前達とは頭の作りが違うんだよ！」

「それは遠回しに自分は皆と比べて馬鹿です、って言ってるようなもんだぞ、ヤッスー。」

「あ、本当だ。」

お前はどこまで馬鹿なんだよ。。。。

そして、その授業の後。

短い休み時間の後の科学の授業。

マルハーゲなジジイが教室に入ってくる。

まったく、小汚い頭だな。光を反射させないハゲは始めてみたよ。。。

「はい、じゃあね、授業をね、始めるね。日直ね、号令をね、お願いしますね。」

語尾は大抵『ね』。一回カウントしたら『ね』の回数が一授業で200回を超えました。『ね』恐るべし。

「気をつけ。礼。」

「「「お願いします。」」」

「はい、じゃあ今日はね、天体のね、授業を」

ああ。つまらねーぞ？ジジイだから声がもう聞いているだけで眠りそう。。。。

「ねえ、寝ちや駄目だよ、つつちゃん！」

ああ、三木か。。。。

「ね、寝かせてくれよ、三木。お、俺は今。限界なんだ。」

「何が？」

「体力と精神力がスタスタボロボロなんだよ。」

「ねえ。いつデートする？」

三木が他の人に聞こえないような小さな声で囁く。

「えええ？いつでもいいよ。」

「なに、それ。なんかそのデートなんか興味ありません、みたいな感じ。」

「いや、決してそういうわけじゃないけどな。」

「じゃあ、今度の日曜日。遊園地とか行かない？」

今日は月曜日だから……。

「まあ、土日だから大丈夫だと思う。とりあえず親に聞いておく。」

「うん！メールしてね！」

その後も、俺と三木は科学の授業の時間は話し続けた。

その陸！ バレーボール！（後書き）

はい、デートの約束出来ちゃいましたね。

でも、まだデートシーンは少し先にして、授業の風景を書いていき
たいと思います！

それではまた次回！

その七！ 消しゴムカス戦争勃発！（前書き）

タイトル通りのストーリーです・・・。

なんか最近スランプな気がします！

マズイでやんす！

その七！ 消しゴムカス戦争勃発！

「ん〜。むにゃむにゃ。」

おうよ。今多分（〜）みたいな感じになってる千だ。いや、青山・・・あーもう、千でいいや。

今日は俺、不覚にも睡魔に負けて至福の時を過ごしてしまった。

睡魔A「おい、寝ちまいな！」

睡魔B「眠いんだろ？眠いんだろ？」

「・・・ぐ・・・。。。」

睡魔A「抵抗しても無駄だ！」

睡魔B「ばーかばーか。寝ろよ〜。」

「・・・。。。。。」

睡魔AB「既に寝てるし！！」

え？テメーが寝てたんだらうが？

・・・いや、絶対絶対睡魔だからよ！

睡魔「どうしよう……。」

「……………」

睡魔A「なんか勝手に寝ちゃってたし。十分くらい経つけど、先生もかなり大事なことを言ってるし、隣に座ってる三木さんはつまらなそうだし……。起こしたほうがいいかな？」

睡魔B「いや、きっと自分で寝たんだし、自分で起きるよ。」

睡魔A「それもそうだね……。僕らの出番なし……。」

……睡魔優しい!!

……ってか結局俺が勝手に寝てたのかよ……。

何だよ、これー。俺のせいだよ、俺のせいだよ、俺のせいだよ……。

睡魔ABC「「お前の責任じゃ！ボケ!!」」

で、出てくんなや、睡魔!!!!ってか睡魔C関係ないやろ!!!!
???

睡魔C「特別出演ってやつですよ、もつ。」

知らんわ!!!』もつ』って何だよ!?!?

.....

だあー。完全に起きてしまった。

ん？

なんだこれは？

ケシカス？・・・俺そんなに、っていうかこの授業消しゴム使っていないぞ？

まさか！

俺はヤツスーの席の方を見た。

ヤツスー、こんな感じ

：（ー）・・・なんかニヤニヤしてる・・・。

犯人は絶対アイツだな。

ケシカスに指紋ついてなくてもヤツスーが犯人だな。

あの野郎・・・。宣戦布告しやがったな・・・。

俺は無言で自分の消しゴムを干切った。（良い子は勿体無いので真似しないように！）

小さいカスが集まったところで戦争開始だ。

「・・・っ！」

俺は先生に見られないように、ケシカスをヤッスーに投げつけた。

「！！！」

見事にヒット！

うっわー。なんかめっちゃ苛々してる。

あ！投げてきやがった！

俺はなんか若干デかいカスを避けた。

・・・後ろに座っていたマツケンに当たってもうた・・・。

「なあ、千。投げてきたの誰？」

「ヤッスーだ。」

「分かった。」

「あつ。」

マツケンが・・・マツケンが！

ケシカス作ってる・・・。とうとうあの地味なマツケンも参加か・・・。

「とじやっ！」

先生にきづかれぬようにマツケンがヤッスーに向かってケシカスを投げる。

「バハマっ！」

ケシカスはヤッスーの隣で眠っていたユウ君に当たり、その違和感でユウ君が起きて、変な声を上げた。

「つてか先生気付けよ。」

「あんだ？俺の安眠を邪魔してくれるとは、いい度胸してんじゃねーか。」

「なんかいつも以上にキレてますね、ユウ君。」

「おい、ボンバー。起きろ。戦争だ。」

「なに、その斬新な人の起こし方！？初めてみたよ！？」

「ん〜。頭斬るぞ〜。マリーアントワネットみたいにチョッキーン！ムニヤ。」

「寝言怖〜！！なんだよ、頭斬るつて！チョッキーンつて！」

「おい、起きろでゴンス。戦いくさでヤンス。」

「ゴンスとヤンス、かぶつてねーぞ？」

「ムニヤ〜。死んじゃええ〜。ゾンビより孤独にミイラより臭くなつて死んじゃええ……。この世の終わりじゃあ！キエエエエ！」

しよええええ！またなんか変なこと言ってる！コッワー！

「はよ起きろ、ボケ。」

あ、投げやりになった……。

「あ、睡魔Cにやられた！おはよ、ユウ君。」

睡魔C……ユウ君についてたのか……。え！？

「そうか、そんなことがあったのか、ユウ君。俺も助太刀しよう。ヤッスー、アイツらを潰すぞ！」

「おお！ケシカスで白くしてやんよ！」

ケシカスで白く！？どんだけ投げるつもりなんだよ！？

「ほら、行くぞ！」

あ、投げてきやがった！結構大きい！

いて！いてーぞなかなか！

あ。

「これを喰らえ、千！」

ヤッスーが……。

テメ、それフル消しゴムじゃねーか。

「どりゃ！」

ヤッスーは、投げた。が、コントロールが狂い……。

俺の隣の三木に……！！

バコッ！

「キヤ！な、何？」

頭に直撃。

「あ。」

ヤッスー、ボンバー、ユウ君。

ヤボユ三国軍事同盟ピンチ！

「アイツらなの？つつちゃん。」

三木、そのひきつった笑顔、恐ろしく怖いよ？マジで。ヤバいよ？
「ヤバい、クラス1可愛いけどクラス1女子の中で強い三木が若干怒ってる！」

「あれは若干じゃない！老干だ！」

「ヤッスー、馬鹿だろお前。」

「俺はアポロじゃねえ！」

「はい？」

「あ、ヤバい！三木が投げようとしてる！」

「み、身を守れ！」

ヤボユ三国軍事同盟が三木を警戒する。

「まず、ケシカス、ケシカス、ケシカス、カス、カス、ゴミ、鉄屑・
・。。。」

「ちょ、ちょっと待て三木！最後お前、鉄屑言つたやろ！？」

「いえ、核つて。」

「うおい！そつちの方が酷いだろ！」

「つつちゃん、ちょっと静かにして！先生にバレるちゃうよ！」

「いや、でも鉄屑。。。。。」

あつ。三木！

もう遅い。。。。。

鉄屑が飛んでつた。

「あー。鉄屑が。」

ビシッ！バシッ！

「ぐはあ！」

「ゲベロンパ！」

「ブホア！」

今なんか変な声聞こえたぞ！？

「誰だ、授業中にゲベロンパって叫んだ奴は！？」

あ、先生も聞いてた・・・。

そして、その後も決死の攻防戦が続き、無事、千・三木・マ三国協
商同盟が勝利した。

その七！ 消しゴムカス戦争勃発！（後書き）

また、次回もよろしくです！

その八！ 保川翔主催第一回1からたご焼きを作るうぜいや創るうぜーパーティー
タイトルが長いですね、しかも滅茶苦茶久しぶりですね。

更新できなくてすみません・・・。

とりあえず、とじつぞ。

その八！ 保川翔主催第一回1からたこ焼きを作るうぜいや創るうぜーパーティー

「たこ焼き食いてえ！」

突然何を言い出すのかねヤッスー。そりゃあ放課後で俺も食いたいような気もするけどさあ。

「この辺、てか帰り道にたこ焼き売ってるとこなくね？」

「千、甘い。甘いよ君は。我々の帰り道にはスーパーという、その名の通り、普通の店を超越した素晴らしい建物があるということを知らないのかい？」

いや超越とか大袈裟だろうが。俺もスーパーの語源は知らないけど店を超越した素晴らしい建物、って意味ではないと思う。

「いや、でもよ。熱々のたこ焼きってスーパーで売ってなくね？ あったとしても冷凍食品だろ。」

確かに大手のイトーヨーカドーとかだったら中に金ダコとかのたこ焼き店があるかもしれないけど、ここは近所のスーパーだぞ？

「いや、諦めたら試合終了だ千君。俺はたこ焼きを1から作る！いや創るのだ！」

「うん、お前その『つくる』の違い俺だから分かったけど、普通の人が聞いたら馬鹿だと思われるぞ？」

「おい、あつたぞスーパー、いや！ハイパーが。」

無視かい！いやそれよか何故スーパーをハイパーに言い換えた！？だが、ヤッスーが言った通り、確かにスーパーまで来ていた。俺達はそのスーパーに侵にゆ　お邪魔した。

「さあ、たこ焼きの素を探すぞ！俺は野菜コーナー見るからお前はその他を探せ！」

・・・はい？

「おい、保川てめえ。探すつもりねえだろ？」

「いや、野菜コーナーにだってたこ焼きの素あるかもしれないじゃん。」

「あるかいつ！どんなスーパーにたこ焼きの素が野菜コーナーに置いてあんだよ！？」

「こんなハイパー。」

「だからハイパーってなんだよっーかたこ焼きの素があるわけな」

お？あれはまさか……。

「ほら干、あれたこ焼きの素またの名をたこ素じゃね？」

「そんな……と、隣に大根がつ……！てか『タコソ』ってなんだよ。」

なんでこうもヤツスーの言う通りになるのだろうか……。コイツが馬鹿なだけにムカつく。

「いちいち『たこ焼きの素』って言うのダルいから『たこ素』。」

「たこ焼きの素ぐらい言えよ。」

「だって噛むかもしれないじゃん」

「噛まねえよ『たこ焼くものもと』は。」

沈黙。

「ほーらね。」

……。ごめん確かに噛むかも。しかも今俺どう頑張っても出来ないような凄まじい噛み方をしたような気がする……。

「……んで、たこ素は手に入れたけども、後はどうすんの？」
「中に入れる物じゃね？なんか好きなもの。」
「たこ以外になんか入れんの？」
「入れてもいんじゃない？てか誰か呼ぼうぜたこパーに。」
「タコパー？」
「保川翔主催第一回1からたこ焼きを作ろうぜいや創ろうぜパーティーの略。」

ながっ！

「たこパーってそんな長いタイトルを略した結果なんだ……。」
「いや実はまだタイトルあるんだ。」保川翔主催ザ・シヨウ・ヤスカワの記念すべき第一回創造神保川翔による仲間達のために作るいや創りあげる最初の最初つまり1から」
「長い。」
「作るいやだから創るつつんだろうがよバーカてめえをパーティーに呼んでやるんだから感謝しろやこの」
「ちよつと待て！お前それ誰に向けて言ってるんだよ！」
「クソ野郎共が！パーティーの略。」
「最後の方なんか雑というかなんとも言えないタイトルだなあ……。」
「まあ、とりあえずアイツら全員呼ぶか。」
「おう、そうだな。……ん？ちよつと待てよ。」

なんかすごく嫌な予感がする。

「たこパーどこでやんの？」
「お前ん家。」

無茶なっ！

「ふざけんなよおい親に連絡してねえよ！」

「大丈夫だ。」

「何を根拠に？」

「俺達にはいつだって強攻突破という手段がある。」

なおさら困る！

「決まりだな。」

勝手に決めるな！

「千ん家でやるのか！楽しみ〜。」

え？あれヤツスーの声じゃない？

「うおっ、もう来たのかマツケン。てかヤツスーいつの間にか呼んだ

んだ？」

「まあね。ボンバー斉藤ももうすぐ来ると。ユウ君はお前ん家で待ってるだよ」

「おおそうかそうかボンバーもすぐ来るのか。んでユウ君が俺ん家・・・俺ん家!？」

やられた・・・

「まあそういうことた早く材料買っちゃおうぜ。」

「そうだな。あ、そうだよッスー。ロシアンたこ焼きルーレットしねえか？」

「マツケンNice idea!」

「英語だけ発音いいなお前・・・。」

「それじゃあよ、ワサビとかタバスコとか必要だな。」

「そうだな、マツケン。なあ千!チョコとかいれようぜ?」

「罰ゲームにしちゃえぐつないなたこ焼きにチョコかよ・・・。」

「罰ゲーム?失敬な。味を探求してるんだよ俺は。」

「・・・。」

味音痴いいいいいい!!

直接は言えないから心の中で叫んだ。

「おい、タバスコとワサビ持ってきたぞ。」

「マツケンThank You!」

「相変わらず英語だけは達人だなあおい。それよりタコ買わなきゃな。」

「Oh! Octopus!」

「うざいから一回死ね。」

「Say that in English please?」

「You're bothering so die!」

「。。。。。」

。。。。。

あれ？ヤッスーがしゃがみこんで、ちよつと体が震えてる？

。。。。。

「泣くなよ。。。。。てかマジで傷ついてんじゃねえよ。。。。。」

「畜生馬鹿にしやがって！この俺様を！！俺様を！！！！」

「お前何様だよばーか。」

「馬鹿って言ったあああ！マツケンこいつが俺を馬鹿、馬鹿と。。。。。」

！

「馬鹿だからしゃあない。」

「マツケンまで畜生！！」

「お前もついいからさっさと材料買っちゃおうぜ。。。。。」

「。。。。。」

たこ、チーズ、納豆とかとりあえず生地で包めそうなものをごごに入れる。

「よし、入れる物が決まればレジへ直行だ！！」

母さん、どうしてだ……。俺の部屋が油臭くなっちまっじゃないか……。

居間で出来たじゃないか……。ああ、俺の部屋が……。

「よし、じゃあ千ん家に行こうぜ……！」

「よし、行くか。」

「はあ……。行こうか……。」

そして俺たちは家に向かうのであった。

その後に悲劇が起きること知らずに……。

その八！ 保川翔主催第一回1からたご焼きを作るうぜいや創るうぜーパーティー

さあさあ千君、あ、いや努君の部屋は果たしてどうなるんでしょうかねえ……。

千の運命やいかに！！！！

続編、早くかけると良いんですが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2181i/>

俺と仲間とその他物語

2011年9月12日15時58分発行